

人生ハンド仏句

第165号
H. 27. 12. 1
(毎月1日発行)

因果応報

住職 谷川寛俊

「こういう言葉をよく耳にします：「これだけ毎日一生懸命お経を上げ、そして先祖供養も欠かさずしているにもかかわらず、あまり良い事がない。離りの家は全く不信心で、手も合わせたことが無ければ先祖供養もしたことが無いのに、楽しそうに暮らしているように見えるのは何故でしょうか？」と。なるほど頷ける話です。しかしこの世の中は、原因と結果のある世です。つまり善い事をすれば結果は良くなるように出来ているのが真理です。逆に悪いことをすれば悪い結果につながるものです。これは因果の法則で誤魔化しができる因果応報の法則です。お経(法華経)の一説に「転重軽受(てんじゅうきょうじゆ)」という教えがあります。「重きを転じて軽く受く」と読みます。自分の過去世の重罪による大苦を、現世で仏様に仕えることによって軽く転じるという意味です。つまり、自分はこんなに一生懸命

信仰しているのに良いことが無い思うのは、過去世における重罪によって、あるいは自分の行為でなくても、両親や先祖の重罪がもたらしている重罪の報いがのしかかっているとも考えられます。離れの家は不信心だけど、幸せに暮らしている様に見えるというのは、その家の親、ご先祖様の積んだ功德、仏教では「積功累徳(しゃつこうるいとく)」と申しますが、現在の子孫にその功德が降り注がれている状態とも言えるかもしれません。そしてもう一つ考えられることは、あなたの行為を肉眼では見えない諸天善神がご覧になっていて、「まだまだ修行が不足しているよ。あなたには見込みがあるから、気が付いてもらいたいのがゆえの試練を与えているところだよ。忍耐して、本当の安らぎの境地へ導いているところですよ」と、試されていると同時に、応援して下さいとも考えられます。法華経にはそのように説かれています。この世での苦しみは、お題目・南無妙法蓮華経の信仰生活によって、苦しみが苦しみでは無くなり、むしろ試練を与えて下さっていることに感謝心すら湧いてくる現世安穩後生善処(げんぜあんのおんごしょうぜんじよ)の境地に至

ることが出来るんですよと、力強い宣言をして下さっているのです。日蓮大聖人もそうでした。ご在世當時、あの荒れ狂う鎌倉の世にあつて、幕府の為政者が誤った宗教者の教えを信じて国を治めているところに、内乱が起こり、天災に襲われるところに、治安の乱れの原因があるとの結論に達し、『立正安国論』を著したのです。現代とは違い、幕府に反旗を翻した者は即刻打ち首に処される時代。自分の命を惜しむことなく、ましてや両親の命も差し出してまで、国の為、貧困に喘ぎ苦しむ民衆のために『立正安国論』すなわち法華経という利他行(生かさされていくことに感謝し、相手のために尽くす生き方の真理)を薦められた御一生でした。国家諫曉(こっつかかんぎよう)という、幕府を誡め諭した事が原因で、言われなき命を狙われる大難に襲われ続けました。まさに心安まることのない死と隣り合わせの毎日でした。因果応報、傍から見れば悪いことをしている原因が悪い結果として現出してきたものだと思えがちですが、日

「人生ハンド仏句」

と打ち込んで頂ければ、ホームページにつながります。

編集・発行

玉蓮山 真成 寺

編集部 谷川久仁子

TEL・FAX 0765-22-2268

携帯 080-3744-2523

こちらの番号でもお寺につながります。

蓮大聖人は違いました。「これは現世における善行(良い行い)の功德によって、過去世の重罪が引き出された結果である」と、ご自分の立場を謙虚に受け止められた上で、「現世において、過去の重罪を洗い流させて頂ける程の善果(ありがたい結果)を頂ける。これ以上の喜びが他にあらうか」とお喜びになりました。利他行を実践する自分の生き方は間違っていないという確信と信念のもと、お釈迦様の最高最上の教えである法華経の布教を生涯の天命に代えられた日蓮大聖人の崇高な精神を、我々日蓮宗門下は忘れてはいけません。

『四条金吾殿御返事』に「苦をば苦とさとり、樂をば樂とひらき、苦樂ともに思い合わせて南無妙法蓮華経と唱え給へ。これに自受法樂にあらずや。いよいよ強盛の信力をいたし給へ」：苦しくても楽しくても南無妙法蓮華経と唱えなさい。それが信心です。その一念が通じていくのです。そうやって人生の時を刻む時こそ最高の幸せであると捉えていくべきですと仰せです。心したいものであります。

